

2012.11.01  
No.372  
(11・12月号)

# 福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



## 学びの秋！

## 船体にひびく 元気な声

九月二三日の久保山忌が過ぎると、秋の修学旅行・社会科見学のシーズンです。

昨年の震災の影響以来、見学の行先変更等はあるようですが、第五福竜丸の母港・焼津からの来館も増えていきます。記憶のある方の子どもや孫世代の来館が多くなりました。次の世代への歴史のバトンが確実に受け渡されていると感じます。同時に記憶の記録化が急務と感じています。

学校見学にくわえウォーキングの会や短歌のサークルなどシニア世代の団体見学も増えてきました。若いインタースタッフもガイドの実力を付け、見学予約なしで訪れたグループにも積極的に声をかけています。

一〇月二日から始まった企画展「マーシャルは、いま」への反響は大きく、ビキニ水爆実験の被害が第五福竜丸だけではないことが、あらため

て問い直されています。

一月三日には、企画展を監修したフォト・ジャーナリスト島田興生さんのスライド・トークのつどいが開催されました（次号詳報）。核実験場となったマーシャルは、かつて日本が植民地支配した地域で、現在に生きる私たちと、決して無縁ではないこと、第五福竜丸と同様に「死の灰」をあげせられたロンゲラップの人たちの苦悩の歴史とたたかいかいについても言及されました。

東日本大震災・福島第一原発事故から一年半が過ぎました。放射能による被害はおさまったわけではありません。来春に予定されている「3・1ビキニ記念のつどい」では、放射能の海洋汚染と魚について、一緒にかんがえていきたいと思えます。（写真は今秋の見学者の様子から）

## ビキニ事件の被害漁民 を追い続ける執念の 記録にふれて

齋藤 貴男

高知県の元高校教師・山下正寿さんが、久々の新刊『核の海の証言』（新日本出版社）を刊行した。三〇年近くにもわたり、教え子らとビキニ水爆実験で被ばくした漁師たちの聞き取り調査を続けてきた方である。彼の取り組みを追い、かつ独自の取材成果もたんと盛り込んだ南海放送・伊東英朗ディレクターのドキュメンタリー映画『放射線を浴びたX年後』も、各地で上映会が催されて大好評と聞く。素晴らしいことだ、とは素直に喜べない。いづれも3・11福島第一原発事故の惨状に伴い、このテーマがようやく注目され始めた結果だという側面を否めないから。

誰よりも私自身が、偉そうなセリフを吐く資格を決定的に欠いている。ジャーナリストを自称しておきながら、実は昨年夏、たまたま『X年後』の基になったテレビ番組のDVDを観る機会を得るまで、山下さんと伊東さんの活動も成果も、まるで知らなかった。

### 米核戦略と追隨する日本

ビキニの周辺海域で被ばくした漁船は第五福竜丸だけではなかったこと。それどころか日本船籍に限っても八五〇余隻に上っていたこと。核爆発に伴う放射能が風に乗って日本列島に大量に降り注いだこと。それを事前に予定していた米軍が、あらかじめ列島各地に観測所を設置して待ち構え、近い将来の核戦争に備えた気象研究にもおさおさ怠りなかったこと。自国民を生



贄に差し出した日本政府は、しかも水爆実験から七ヵ月後、わずか二百万ドルの見舞い金と引き換えに、米政府の求めるまま、一切の幕引きに応じてしまったこと。したがって被ばく者一人ひとりにはスズメの涙ほどの補償もなされず終いだったこと――

あまりと言えばあまりに重大な事実の数々を。あるいはまた、それらを日常の仕事の傍らで丹念に掘り下げ続けるお二人の存在さえ知らなかった私は、無知蒙昧の極みだった。

恥ずかしくてならない。穴があつたら入りたい。言い訳以外の何物にもならないのを承知で書けば、しかし、私ばかりでもなかったは



上映予定の問合せはウッキープロダクションまで

ずだ。山下さんのいる高知県と、南海放送のある愛媛県を除外して、圧倒的多数の日本国民にとって、『核の海の証言』や『X年後』で示された内容を伝える報道に触れた体験は皆無に近い。極端に矮小化されたイメージばかりを、私たちはいつの間にか植え付けられてしまっている。

だからって、それは全国紙やキー局が腰抜けだからなのであって俺のせいじゃねえやと聞き直つて済ませられる問題ではない。今回の新著と映画版DVDを、そこで私は食いつくように読み、観た。後者では被ばくして亡くなった

船長の夫人が洩らした「問題の本質に」気がついた漁師がいたとしても、それを口にしたら二度と船に乗れなくなる」という言葉が忘れられない。テレビのDVDを観た時には、「アカだつて言われる」という嘆きもあつた記憶がある。彼女は「そういう時代でした」とも続けていたが、では時代が違えば異なる結果が導かれていたのだろうか。

山下さんの新著には、福島第一原発事故に関する報道と、ビキニ水爆実験報道とが酷似しているとの指摘があつた。さもありなん。

そう言えばこの間の今年五月、私は事故を起こした原発の運転主体に焦点を当てた『東京電力』研究 排除の系譜（講談社）を上梓した際、せめて彼のような人物に笑われるような仕事にだけはすまいと考え、ひたすら謙虚に、慎重に書き進めることばかりを心がけていたのだっけ。その分だけ、他のいわゆる原発モノより少しはマシな作品にできた自負はあるものの、まだまだだ。

こうして山下さんを讃えながら、私は忸怩たる思いでいっばいだ。ジャーナリズム界にあつて彼を追う存在が伊東さんぐらいしか見当たらない惨状は、いくらなんでも情けなさ過ぎる。

私も及ばずとも付いていきたい。「誰かがやらなければならぬのですから」と、山下さんも『X年後』で語っていたではないか。（さいとうたかお／ジャーナリスト）

被ばくを隠した当時と今と

# 「平和を語る第五福竜丸の集い」20回 ～本当によく続いたなあ

中村 博

今ではあたりまえのことになつてきた「九・二三平和を語る第五福竜丸の集い」という展示館での行事。二〇回を迎えたところで振り返つてみます。(展示館の雨漏り修繕のため一回中止したので、本来なら二一回ですが)。

\* 当時も現在も世話人をして  
いる私ども(中村・堀田・瓜生・佐藤)は、特別福竜丸と関係があつたわけではない。民話  
を子どもとどう楽しむかとい  
うことで「子どもと民話の会」  
という小さなサークルを毎月  
おこなつていたのです。

つどいの司会で毎回説明し  
ているように、世話人の堀田  
侑子さんの御主人が他界され

たとき、「何かしたい」とい

うつぶやきを、実現させた  
けなのです。江東区の教職員  
組合にいた故・堀田尊生さん  
は私の旧友で、第五福竜丸が  
夢の島に捨てられたとき、「沈  
めてしまつていいのか」と、  
多くの仲間と泥の海から引き  
揚げた代表の一人でした。そ  
こで考えたのが「偲ぶ会」で  
はなく「平和を語る集い」だ  
つたのです。

当時、「多くの民主的な団  
体に呼びかけたら…」とも言  
われましたが、タイミンクと  
いうものがあり、小回りのき  
く私どもが手掛けることにし  
たのです。そのとき「一回だ  
けでのものでなく、長続きす  
るようなもの」ということを

念頭に置いたことでした。

\* 第一回目の集いは、私ども  
の守備範囲でしたので、中心  
が「語り」「紙芝居」でした。  
友人でもある声楽家の相川マ  
チさんや、堀田さんの友人が、  
川崎市から合唱で応援してく  
れる、というまったく個人的  
なものでした。

二回目になると、合唱して  
くださった方がトランペット  
奏者の松平晃さんに声をかけ  
たり、相川さんが出演できな  
くなる代わりにと、小さな楽  
団を主宰されている松島よし  
おさんを紹介してくださった  
りというように、現在の形が  
だんだんできあがつてきたの  
です。乗組員の大石又七さん  
が参加してくださったのもそ  
の頃です。大石さんはここで  
「マグロ塚」の建設を提案さ  
れました。いろいろなことが  
ありましたが、二年後には「マ  
グロ塚」が実現したのです。

こうなつてくると、「つど  
い」をもっと充実させ、参加  
してくださる出演者さがし  
が、私ども世話人の仕事にな  
つてきたのです。

もともと個人的に付き合い

福竜丸展示館ボランティアの  
会も出演



のあつた劇団の公演を観に  
行つては、これはという方に  
声をかけ、出演を言お願いし  
に歩いたものです。そういっ  
た方たちからの推薦で、指導  
されている地域の朗読の会  
の方が、また「集い」を観てく  
だされた方が自分も出演した  
い、という申し入れなどもい  
ただくようになりました。

「集い」のプログラムにつ  
いては、以上のような長い経  
緯があるわけですが、ここ  
には費用もかかります。また第  
五福竜丸の保存のためのカン  
パも必要なわけです。なんと  
かしくなくては…。

寄付をお願いするため、  
郵便局の振替口座を作りました。  
また我が家には普段の日

にどなたでも寄付していただ  
けるよう「ワンコイン」の箱  
を用意しました。趣旨に賛同  
して袋をもつてカンパを集め  
る方も出てきました。つどい  
の当日には小さなバサーも開  
くことにしたので、「子どもと  
民話の会」に参加してい  
た漫画家が似顔絵を描き、そ  
の売上を寄付して下さるよ  
うにもなりました。

このようなあゆみの集大成  
が現在の姿です。続けてきて  
よかつたというのが現在の心  
境です。

\* ある年、「中村さん、これ  
を使つてください」と、司会  
をする私に渡されたのが、マ  
イクでした。私の声量が落ち  
たからでしょう。考えてみれ  
ば八四歳の年寄りになつてい  
たのです。この世界から  
核兵器と原発をなくすまで続  
けてなければならぬと、りく  
みだと思つています。後を引  
き継ぐ方のために、簡単な記  
録として残しておきます。

(なかむら ひろし)「平和  
を語る第五福竜丸の集い」世  
話人代表、民話研究者、元小  
学校教師)



福竜丸へのカンパを紹介する  
中村博さん

連載⑭

晴れた日に  
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

\*

会の後半、展示企画に合わせるように二つの曲が演奏されました。映画「第五福竜丸」の「出航の歌」、「二三人漁夫たちのバラード」です。二三人が福竜丸乗組員であることはいうまでもありません。

この二つの曲が、「原爆小景—水ヲ下サイ」に前後しての二つのイベント参加のなかでつくられたいきさつを、林さんが語りました(要旨)。

(林さんの話)

二〇一一年の四月二二日から五月一八日まで、3・11福竜丸原発事故後のいまを、第五福竜丸が持ちかえった「死の灰」を主要展示として、「EXPOSE E・死の灰」展が開かれました(場所は東京三軒茶屋のアートスペースKEN)。

期間中の四月三〇日、作曲家の林光さんをむかえてコンサートとトーク「水ヲ下サイ」「原爆小景」の作り方がもたれました。トークセッション(対話・質問者は安田和也第五福竜丸展示館学芸員)では、五八年「水ヲ下サイ」から、七一年「日ノ暮レチカク」夜、〇一年の終楽章「永遠のみどり」までの作曲の道のりが興味深く語られました。

\*

音楽を書きました。あれっと思つた人もいたようです。つまり悲劇の始まりなのにといいことですね。ほくは悲劇を予告するのではなくて平和な事態があとから悲劇をむかえる、その船が海へ出ていくシーンに「漁夫たちのうた」をオーケストラで演奏したのです。

「二三人の漁夫たちのバラード」は、「最後の武器」のなかの合唱曲です。

船乗りたちは／西からあがる／太陽をみた／嘘の太陽は／赤く海を染め／やがてもえつき／間もなく東から／本物の太陽がのぼると／白い灰が降りだした……とつづく。起こったことを述べていく安部公房らしい詩です。

\*

第四回原水爆禁止世界大会の開催地は東京、日程は八月二二日から二〇日でした。

「最後の武器」の上演は二〇日夕刻、市民参加の大会宣言発表大会・日比谷野外音楽堂で行われました。演出・千田是也、音楽・林光、美術・朝倉撰。出演は語り手に岸輝子、ほか俳優座、民芸、青年座、三期会有志と中央合唱団など二〇〇名近くでした。

日本の構成は、プロローグ／武器の歴史／最後の武器／子供たちの歌／被害状況／ローゼンバーク／水爆への道／どちらが無知か／と展開し、終章で次のような「新しい出発の歌」がうたわれます。

くでした。

行こうよ／たしかな平和を  
／この手につかむまで／行こうよ／ヒロシマの火を／最後の武器の／思い出にするために／行こうよ／ふたたびぼくらが／西からのぼる太陽に／焼かれることのないように／さあ出発しよう

出演者の全員合唱から会場満員の参加者の唱和をよんで野外劇はおわります。閉会後には海外代表をふくめ提灯デモが行われています。私は日本原水協の事務方として参加していました。

「二三人の漁夫たちのバラード」六連の詩文は次のとおりです。

\*

船乗りたちは  
西からあがる  
太陽をみた

嘘の太陽は

赤く海を染め  
やがてもえつき

間もなく東から  
本物の太陽がのぼると  
白い灰が降りだした

船乗りたちは  
食欲を失い

広島のことを思い出す

頭をかくと

指のあいだに

毛の束が残った

久保山愛吉は死に

残りの二二人も

二度と船には戻らなかった

\*

林光さんは二〇一二年一月五日に亡くなりました。追悼の集いで、この時の録音による「二三人の漁夫たちのバラード」が流されたとき、二〇一一年四月三〇日の「林光ピアノコンサートとトーク」の記録はDVDで見ることができません。なお「最後の武器」の脚本は新潮社刊安部公房全集第九巻などに収録されています。

(やまむら しげお/協会顧問)